

古代仏教寺院の礼拝空間と礼拝石

光 森 正 士

一、

初期仏教々団、つまり僧伽は釈尊を中心として比丘、比丘尼らで構成されていた。しかし、後には在家の人びと優婆塞、優婆夷なども仏教に帰依するものが多くなって次第に大きく発展した。初期教団にては比丘や比丘尼たちは一定の土地に留まり、固定的に生活するというのではなく、常に各地を転々とする移動集団であり、絶えず移住する生活の連続であった。このことはある地域に対する執着を離れることにもなり、また、地域に密着する私的感情を断ち切ることであり、愛着をつのらせることも避けた。

僧伽の人びとは、いつも托鉢によって食を得、喜捨によって衣類も得ることができた。各地を転々とすることから、あらゆる人びとから供養をうけることができた。シンプルな生活を旨とされた釈尊が、僧伽の人びとと打ち揃って移動することは、弟子たちに対する無言の教

化であったであろう。

しかし、釈尊はやがて弟子たちが、一地域に定着し、そこに僧伽の生活のための施設、生活空間を築くであろうという推察もすでに持っておられたようである。それはインドが有する気候、風土に關係が深い。インドには長い間降り止まぬ雨季がある。雨季には外出できず、石窟内に留って説法を続け、仏弟子たちもこれを聴聞し、勉勵に心を運ぶわけで、これを「安居」(夏安居)と称する。

このとき僧伽の人びとは、しばしの間とはいえ定住することを余儀なくされ、石窟内や園林につくられた至って簡素な小屋(草庵)に身をおくことになる。雨季が開けるまで、外へ出て説法することなく、一般大衆を教化する道はほとんど閉ざされることになったと思われる。初期教団にとって比丘・比丘尼たちに必要な施設とは一体何であったか、それは執寝(居住)の場であり、また、ともどもに長老より説法聴聞する場でもあった。いまでいう僧房と講堂である。初期教団にあっては帰依礼拝の対象はなかった。釈尊入滅(入涅槃)までは、も

とより帰依し、長跪合掌する相手は釈尊である。ほかには何もなかった。釈尊はその入滅するとき、「自灯明」「法灯明」を説かれたというから、入滅後の教団はこれを遵守したであろう。

一僧伽の生活必需品は「比丘六物」「比丘十八物」と呼ばれ、極めて簡素なもので、これらは上下の区別なく、おそらく形態的にも、また、品質的にも同じもので、生活は簡素のものであっても、その内容は心豊かに満足できるものであったと考えられる。そこには釈尊の絶大なる教化の力があつたからである。

八十歳でその生涯を閉じられた釈尊が、かねて教団の行く末を予測されたごとく、僧伽の人びとがある定った地域に居をかまえるようになった。

經典では、つねに行を共にした比丘たちは千二百五十人という。このような大所帯で定住することになったとすると、それは大変である。もとより、釈尊入滅の後は、仏弟子たちが部派仏教として拡散したり、分枝してりして増減したであろうが、在家信者はどうであつたろうか。

茶毘に敷された釈尊が遺したものは、遺骨であるが分骨されて仏塔が多く造立された。それまで礼拝の対象、礼拝の空間をもたなかった人びとは、こぞって仏塔を礼拝し、釈尊の偉大さを讃仰した。僧伽にあつては仏塔の礼拝は行われなかったようであるが、在家者の篤い信仰が僧伽にも大きく影響を与えるところとなり、僧伽・藍(摩)、精舎の成立をみるようになった。伽藍構成の必要欠くべからざるのは、僧房

(僧院)であり、また大勢が集会できる講堂、それに仏塔を安置する塔院がつくられた。

アジャンターの仏教窟、エローラやオーランガバードの主要な石窟寺院では僧院窟と塔院窟が相並んでつくられている。

仏像が成立するのは、さらに後で仏入滅のあと約五〇〇年も経てからである。仏像の成立は釈尊の生前の意趣にはない、むしろ反対するところであつたろうが、しかし、釈尊を知らぬ仏教信仰者が可視的に、触知的に釈尊を知ることができるようになった訳で、これが西北インドのガンダーラ、中インドのマトゥラーを拠点として流行し、拡大していった。時代の大きい要請ではあつたろうが、一度釈尊の姿が成立するとそれはだんだん強固なものになり、すでに成立していた、釈尊のもつ瑞相(三十二相)などが彫像に投入された訳で、礼拝の対象として仏塔などと結びついて、必要不可欠なものとなった。仏像、とくにガンダーラの仏像は明らかに異民族の造形であることを感ずるが、それをうけ入れたのはインドの仏教徒である。

仏教の発展と、その後の世界的に展開することになったのは仏像の成立がどれだけ寄与したかはかり知れないものがある。素材を問わずひたすら仏像を造像し、礼拝してきたのは、その仏像を通して本来の仏陀を拝もうとしたからである。これは単なる偶像崇拜ではない。

インドに起こった仏塔や祠堂というものは、その礼拝に当たって右繞三匝というように、右廻りに仏塔の周囲を三度廻るのが作法とされる。これは今日でも仏国寺の大雄殿前にある石造塔を礼拝するのに、この周囲を三匝しているのを見る。わが国でも古くはこの作法が行われていたものと考えられるが、真の意味での仏塔礼拝が行われなくなった平安後期頃からこの作法も衰退したと考えられる。

単にわが国の古代寺院にとどまらないが、古代寺院のもつ伽藍配置はその機能的に分けて考えると二つにわけられる。

その一つは塔や金堂などの主要建造物のある空間、これらは回廊にて囲まれ、礼拝や読經を行う宗教的行事を行う空間。これはインド以来の塔院（チャイティア）的空間（区画）という。

いまひとつは講堂や僧坊、食堂、鐘樓、経庫、温室（湯屋）など僧侶の日常生活、あるいは修学修行を行う空間がある。これを僧院（ビハーラ）的空間と名付けて区分する。

現在の寺院にてはこの宗教的行事をとり行う空間はすべて仏堂の内部分で行い、内・外兩陣に分たれているが、元來仏像を安置し、その仏像の占有空間に僧侶が入り、また外陣と称し、礼堂ともいうべき空間に俗人が入っている。これは中世、特に室町時代以降のことと考えら

れるが、これがさらに一般化したのである。

古代寺院には堂内に土壇が築かれ、これを須弥山になぞらえて須弥壇と称しているが、この壇上に仏像はいずれも露出状態で安置され、どこからでも拝め、宮殿や厨子というものはない。仏像そのものが仏堂を占有するわけである。仏堂内は仏国土を象った清浄なる占有空間であり、聖域である。僧侶は仏堂内を清掃したり、香・華・灯などの供物を献ずる目的などをもって堂内に参入するのであって、みだりに出入しない。堂内安置の本尊を礼拝したり、經典読誦するときなどは、すべて堂外、すなわち白洲からこれを行ったものと考えられる。その白洲において礼拝の所定の場所はどこかというところ、それは仏堂の正面に一基建てられた石灯籠、あるいはその手前に敷設された礼拝石からであった。この礼拝石には自然石と長方形に形造られた切石とがあるが、いずれにしてもその役目は変わらない。

但し、雨天、降雪等によって堂外での礼拝が行えないときはどうするのかといえは、それは中門や回廊から礼拝したのである。

次いでわが国に現存する礼拝石についてこれを述べ、さらに韓国に現存する礼拝石の諸例について略説し、図示することとする。

法隆寺の礼拝石

法隆寺西院伽藍の金堂正面と五重塔正面とにそれぞれ一基ずつ自然石をそのままに用いた礼拝石が据えられてある。

金堂前の礼拝石は奥行一二七・〇cm、幅一八〇・〇cm、高さは約三〇・〇cmある。この礼拝石から金堂内須弥壇中央に安置される釈迦三尊までの距離は一、九六〇・〇cmあり、かなりの距離と認めるが、金堂中央の扉と裳階の扉とを開くと、まさしく三尊像が扉の枠内におさまる。また、雨天、降雪等を想定し、背後にある回廊にまで下っても、やはり三尊像をしっかりと礼拝できる。この金堂前や塔前に石灯籠がないのが不思議と感じられるが回廊の南西に設けた入口を経て回廊内に入ると、その左方に鎌倉期の制作と考えられる石灯籠が所在なく一基だけ建っている。この石灯籠はかつて金堂前か、あるいは五重塔前の礼拝石の前(北)に建っていたとも考えられる。当初の石灯籠はもとより失われている。(図1・2・3・4参照)

五重塔前の礼拝石は金堂前の礼拝石に比してやや小振りで、四隅に丸味がみられる。その法量は奥行き約一〇〇・〇cm、幅約一一七・〇cm、高さは二二・〇cmあり、礼拝石から五重塔の初層中心までは一、九一〇・〇cmある。(図5・6・7・8参照)

要するに法隆寺西院伽藍においては、礼拝石と礼拝対象との距離は一九m以上あって、かなり距離をおいていたことが知られる。

法隆寺東院伽藍つまり夢殿の前にも礼拝石が埋まっているという。これは切石で、地下の工事の際に二つに割られたという。これは発掘して掘出すべきものと考えられるが、現在この礼拝空間として、丁度中門に当たるところに礼堂が設けられており、これより礼拝するのが鎌倉以来

の正規の作法であったと考えられるが、現在は八角円堂の中で法要儀礼が行われている。

法隆寺は自然石で作られた礼拝石と切石によるものと三基あることになる。

当麻寺金堂前の礼拝石

当麻寺金堂の前(前庭)には、その堂宇の中心より一、四一五cmのところわが国最古の石灯籠として名高い大きな石灯籠があるが、その石灯籠より二二五cm距てて、自然石による礼拝石がある。もとより自然石であるによって形は不整形であるが、一面に直線的になったところがあり、あるいはこれが正面に位置したかと推測される。だからこの自然石はもとの位置より若干動かされており、石の上面はほぼ平らになっているのに、左右で高低差があり、これも礼拝石の性格をわかまえなくなった時代に移動したものと考える。また、金堂から南へ伸びる中軸線よりわずかに右方へ片寄って石が伏せられているのも、移置された証拠であろう。石灯籠より少し右寄りなるは本尊礼拝に都合よく置き換えられたかもしれない。

礼拝石の法量は奥行八〇・〇cmと、左右の幅が一四〇・〇cmで法隆寺五重塔前の礼拝石より一回り小さい、地上に露出する礼拝石の高さは三〇・〇cmと二三・〇cmとである。

礼拝の対象(仏像)から礼拝石との距離が一五・〇m、一六・〇m

くらいが一般的な数値で、韓国仏国寺の大雄殿、極楽殿の礼拝石もほぼこれに近い。(図9参照)

鳥取・三仏寺本堂前の礼拝石

投入堂のある三仏寺の本堂の前に、堂内の中心から約二〇・〇mのところ上面が平で、周りを円形につくり、地上に露出する礼拝石の高さは一五・〇cmばかりある。この礼拝石の直径は上面で約一一〇・〇cmであるが、下方では若干大きくなって一二〇・〇cmある。

礼拝石を円形に形造るのは大変めずらしく石質は凝灰岩のごとくで、比較的軟質にもと見受けける。(図10・11・12・13参照)

大阪・四天王寺の礼拝石

四天王寺の南門を入ったところに石灯籠と礼拝石とがある。礼拝石は石垣が囲まれており、小さな石柱碑に「熊野権現礼拝石」と刻まれており、四天王寺の塔・金堂を拜む礼拝石ではなく、熊野大社を遙拝するための礼拝石である。法量としては長さが一九〇・〇cm、幅(南九二・〇cm、(北)七〇・〇cmあり、高さは一一一・〇cmある。これは豊一枚ほどの大きさをもつもので、もとは古墳時代の石棺の蓋を転用したものと考えられる。石質は凝灰岩である。(図13・14・15参照)

信州・常楽寺の礼拝石

四天王寺の礼拝石に匹敵する長方形の上面平らな切石をそのまま伏せたものが常楽寺の石造宝塔(重文)の前にある。寺伝にもみえず、この石が一体何であるか不明とされてきたが、筆者はこれは礼拝石と考えるにふさわしいものと考ええる。

山田寺金堂前の礼拝石

山田寺の金堂前に埋設されている礼拝石は発掘後もと通り地中において現今これを見ることはできないが、拝見当初の写真がこれを示している。この石の前にて倉山田石川麻呂が自害したというが、この礼拝石は金堂基壇の正面の石段の前に敷設されており、通常の礼拝石とは位置的に異なるところがあり、また石灯籠もその前に建てられていない。これは写真でみる限り、整然とした切石であり、地上に露われた高さもさほど高くはない。(山田寺発掘報告書)参照)

いまはその存在確認ができていないが、昭和三十年代に発掘された飛鳥寺や川原寺でも礼拝石があったように記憶するとは鈴木嘉吉氏の言である。

わが国にても礼拝石の存在に対する認識はすこぶる少ないものがある。

韓国では礼拝石のことを拝礼石というが、いまも明確なすがたで仏堂の前にある例をいくつかみる。しかし、いまもこれが礼拝石としての役割を果たしているのかといえば、わが国同様全くその役目を果たしていない。大方はその存在に対して無関心である。

韓国にある礼拝石のもっとも典型的な作例は、慶州・仏国寺の大雄殿の前庭に石灯籠と共に存在し、また極楽殿の前庭にも同様にみるこ
とができる。保存状態は概して良好である。ただいささか気がかりなのは連日大勢訪れる観光客がこの礼拝石の上に立って記念写真を撮ったりしているので礼拝石の上面はかなり痛んでいる。韓国には敬虔な仏教徒はいまなお多い。この石がかって何の役割を果たしていたかを知るならば、この礼拝石の上に立つというような無作法な行為はしないだろう。

仏国寺以外でも礼拝石が石塔や仏堂の前にいまも存在するのは、次の諸寺というが、これらはまだ調査できていない。

- | | | |
|------------|------------|---------|
| (1) 中原 青龍寺 | 普覚国師定慧圓融塔前 | 礼拝石(一基) |
| (2) 求礼 華嚴寺 | 孝台四獅子石塔前 | 礼拝石(二基) |
| (3) 荣州 浮石寺 | 無量寿殿八角灯籠前 | 礼拝石(一基) |
| (4) 論山 灌燭寺 | 石塔前 | 礼拝石(二基) |

礼拝石がもとの位置を離れ、別のところに保管されている例がいくつかある。

弥勒寺 礼拝石(三基)(断片二基)

通度寺 礼拝石「大康王一年乙丑二月日造」銘(一基)

東国大学博物館 礼拝石(一基)

慶州博物館境内 礼拝石(八基)

これらの諸例について若干検討を加えたい。

韓国に所在する礼拝石の諸例

韓国には礼拝石(拝礼石)の作例がかなり多く存在すると考えられているが、その全貌は明らかでなく、ごく限られた範囲ではあるが、いままでに調査し、見聞したものについて若干検討を加えて報告することにする。

①慶州仏国寺大雄殿前の礼拝石

これはほぼ完形で残っているが、天板に当る石の上面部に剝落(離)がみられ、またこの上に土足で上る人びとが多いことから上面の磨滅がかなり進んでいる。上面の縁には面取りが施されており、その下の脚部(軸部)には蹴込みがあり、長側面には格狭間が二つ刻まれてあり、短側面では一つの格狭間が刻まれている。格狭間はいかにも古様で、牙床のような強く鋭い剝形をみることができ。四隅の脚は直線的に大きく掘をひろげ、安定感をかます。下框(地摺り、台輪)は低

く、地中にかなり埋まっているようにも思える。石質は花崗岩と考えられるが、火中によってか側面の表面は黒ずんでみえる。礼拝石としてはまことに簡素なすがたをもち、それだけに古様な感じを与えるものである。八世紀初頭頃の作であろう。

(法量)

幅 一三六・〇cm 奥行 七二・〇cm 高さ 二六・〇cm

(図16・17)

②慶州仏国寺極楽殿前の礼拝石

礼拝石としては先の大雄殿前の礼拝石よりは一周り小さいが、下框が四段あって高さが若干高い。上面には同じく面取りがあり、長側面に二つ、短側面に一つの格狭間を刻み、その刳形も力強いものがある。下框の下には細かい框を入れ、さらに丸くかま鉢形に面取りを施した框とその下に薄いもう一段の框がみられる。惜しまれるのは上面の右寄りのところで割れており、全体を二分することになっている。これも上面にかなりの磨滅がみられる。大雄殿の礼拝石よりは少し時代が降るかも知れないが統一新羅時代と考えて大過ないだろう。やはり、これも火中しており側面が黒くみえる。先述の破れはその火中によって生じたものかも知れない。統一新羅時代、八世紀の作。

(法量)

幅 一一一・五cm 奥行 六四・五cm 高さ 二九・〇cm

(図18・19)

③通度寺大雄殿前の礼拝石

この礼拝石は現在かなり破損しており、もとの所在を離れて宝物殿の中に置かれ、周囲が枠組の中に納められていることから側面をみる事ができない。その上面には横に長い形の蓮華文を線刻し、その周囲を太い界線で囲い、さらにその外、周縁部には唐草文を彫っている。その上面の文様は几帳を象っているようにもとれ、中央の横長の蓮華文は香炉を置くための位置を示唆するところかとも思われる。この蓮華文の左端部と界線との間に「大康王一年乙丑二月日」と刻銘がある。この大康は中国の遼の道宗の年号であり、これは西暦一〇八五年に当たるが、高麗時代宣宗の二年に当る。礼拝石の上面に蓮華文を浮彫する例はかなりみられるが、この礼拝石のように線刻でもって文様を表現する例は珍しい。また年号を有し、製作年代を明らかに知りうる例としてはなほだ貴重である。

(法量)

幅 七二・〇cm (図22)

④弥勒寺の礼拝石

これは礼拝石の断片というべきもので、同寺の遺跡より出土した多くの石が積まれてあったところで見付けた。花崗岩と考えられ、

長側面に格狭間二つが刻まれてあるが、この礼拝石は前後のほぼ真中で二つに割れており、向かって右方にも格狭間の一つ分くらいが欠失している。もとは格狭間が二つある大きな礼拝石であった。この格狭間以外決め手となる特徴が少く、時代は明確ではないが形は簡素であり、八世紀に遡り得よう。

(法量)

幅 八三・〇 cm (図29・30)

⑤ 東国大学博物館前の礼拝石

この礼拝石は博物館の建物の南壁側面の下であり、通路の脇に一段高くなったところにいわば無雑作に置かれてある。先年黄寿永先生を訪問したときその存在を知り、改めて調査に伺ったものである。

この礼拝石は小振りで、しかも非常に簡素なつくりをもっている。

上面は平滑で、縁によくみられる面取りなどはない。長側面も短側面もともに格狭間は一つつつ刻まれており、下框(地摺り)は上部の天板部より少し厚い。格狭間が一つつつで少いことや、その造りが至って簡素であるのが特徴的である。石質は白く、花崗岩というより砂岩のような感じであるが、いずれにしても保存がよい。

(法量)

幅 六九・五 cm 奥行 四四・五 cm 高さ 二五・〇 cm

(図33・34・35)

⑥ 慶州博物館にある礼拝石

博物館の南側、および西北部の庭園など芝生を植えたりした花壇に散在させて礼拝石や奉炉石を都合八基を置く。完形で保存の良好なものもあるが、火中によって干割れを生じたものや破れて断片と化したものもある。しかし、これだけ礼拝石や奉炉石が集中して存在するのは韓国でも珍しく、これらの石に着目して集め、野外展示を計った先人に対しては敬意を放つものである。この礼拝石は大別して二種がある。一つはその上面の天板部が素面、つまり扁平に造られるものを、いま一つは、その上面に天板部の中央部の真中、およびやや前方寄りに蓮華文を浮彫で彫出すものがある。この蓮華文を彫出したものを「奉炉台」「奉炉石」と称している。わが国ではかかる蓮華文のあるものをまだ見聞していないが、この蓮華文を彫出したの上には香炉が据えられたであろうと考えられ、燻香が行われたところといえる。

先述のごとく、蓮華文に彫出す位置に、真中の場合と、前方に寄せて彫つてある場合とがある。真中に蓮華文をもつものは純然と奉炉台だけに用いられたものであろうか。また前寄りの片寄せたものは香炉ばかりでなく、他の礼拝石と同一ような用い方がなされたと考えられることもできる。よって上面無文で平滑なものは礼拝石として、上面中央に蓮華文のあるものは奉炉石として、また前寄りに蓮華文を附するものは礼拝石と奉炉石との性格を併せて所有するものと考えられることもできる。礼拝石の起源や生い立ちのようなことは後述するつもりであ

るが、礼拝石はこの上に経巻などを展げて、ここで看経・読経するところと考え、礼拝石は経台と同じものと考ええる。奉炉台は香炉をのせて仏前に供する香炉台、香台、香几というようなものがある。それは台石の上面に蓮華文をつくるか、つくらないかという違いになっているが、もともとは両方とも献物几から発生し、展開したものであろう。慶州博物館にある礼拝石、奉炉石は八基であるが、蓮華文の彫出のないものが四基、また蓮華文を彫出するものも四基ある。

次にこれらを順次略述して解説したい。

A 天板部素面の礼拝石

A-①礼拝石

上面が扁平で、面取りのない長方形の簡素な礼拝石である。天板部は厚みが五・五・あり、長側面には格狭間が二つ、短側面は格狭間一つが彫られている。この格狭間の下には下框（地摺り）に当る部分を備えていると考えられるが、現在下半の部分が土中に埋れているのでもとの全形を知ることができない。しかし地上に出ている部分がほぼ完形である。

（法量）

幅 七六・〇cm 奥行 四一・五cm 高さ 五・五cm

（図25・26）

A-②礼拝石

この礼拝石の表面には実に多くの干割れのような割れ目をもってかなり強い火勢の遭ったと考えられる。長側面には四つの格狭間、短側面には二つの格狭間が刻まれており、上面部に扁平、下方には框（地摺り）をつけている。礼拝石としてかなり大振りのもので、形態は至って簡素である。もとのあった寺院は不詳であるが、かなり大きな仏堂の前に据えられていたものと推測する。

（法量）

幅 一五七・〇cm 奥行 七一・〇cm 高さ 二八・〇cm

（図27・28）

A-③礼拝石断片

この礼拝石もいまでは断片となっている。長側面前部には格狭間が一つ半みられ、短側面には約半分が遺っている。また背側面にも備の脚の両側に半分ずつの格狭間がみられ、これが礼拝石であることを示している。かなり強い火災に遭遇したらしく石の表面が赤く変色しており、かつ細かく干割れ状の割れ目が入っている。全容をうかがえないが格狭間の彫り口などから統一新羅八世紀のものである。

（法量）

幅 七九・〇cm 奥行 七五・〇cm 高さ 二六・〇cm

（図23・24）

A-④ 礼拝石断片

この礼拝石も同じく強い火に遭って割れたもので、全体の約三分の一程度が残ったものである。前面の長側面には格狭間が一つ半、左方短側面にては格狭間の約半分が認められる。丁度前後では真二つに割れ、右方ではその側面に達しない格狭間約半分の辺で割れて欠失している。石質は花崗岩で、やはり格狭間の彫りからみて統一新羅（八世紀）をくだるものではないかと考えている。

(法量)

幅 九一・〇 cm 奥行 三四・〇 cm 高さ 二五・五 cm

(図 36・37)

B 上面天板部の中央に蓮華文のある礼拝石

(これを奉炉石、奉炉台石ともいう)

この礼拝石はわが国では、いままで全くその存在を認めるところではないが、中国敦煌莫高窟、例えば二二〇窟、四四五窟などの浄土変を描いた壁面の中に、かかる蓮華文を香炉台の上面に描出したものはいくつかある。元来は木製の香炉台などの表面に彩色で蓮台を描いていたのかも知れないが、韓国にては石造の台の上面に蓮華文を共彫りしている。

B-① 奉炉石

これは慶州邑城址出土とあって、寺院址出土のものではないが、至っ

て保存の良好なものである。地上には上面天板部と側面の格狭間とが漸く見える程度で、かなり地中に埋まっているように考えられる。

上面の縁には面取りがあり、その中央真中の彫出された蓮華文は四弁花で間弁四つをもっている。その彫出は余り高くはない。格狭間も長側面は二つ、短側面には格狭間一つを彫出する。いずれも彫り口は浅い。石質はやはり花崗岩である。

(法量)

幅 八四・〇 cm 奥行 四九・三 cm 高さ 一五・〇 cm

(図 42・43)

B-② 奉炉石

かなり大振りの奉炉石である。上面天板部には縁に面取りをつくり、その中心に八葉の蓮華文を彫出してあったが、この蓮華文を中心に左右にそれぞれ不整形の溝が彫られてあり、深いところは六・五 cm も彫られてある。ほぼ一文字風に彫られたこの溝はもとより後世のものであるが、ここで油か何かを燃したように黒く変色がみられる。この溝は広いところで幅三〇・〇 cm、最長九七・〇 cm と大きい。天板部は厚さを五・〇 cm、脚部は一二・〇 cm、地摺り（台輪）は高さ五・〇 cm ある。長側面には格狭間を二つ、短側面は一つの格狭間を彫出する。製作はやはり八世紀を下るものではない。

(法量)

幅 一〇六・〇 cm 奥行 六〇・五 cm 高さ 二一・〇 cm
(図51)

B-③奉炉石

この奉炉石は慶州校洞出土といい、博物館の北側の前庭に大きな石灯籠と共にあるが、元来対のものかどうか不明である。

上面の縁は面取りがあり、その中央前寄りに八葉蓮華文を彫出する。その蓮華又は直径三七・五 cm あって、ゆったりと大きい。側面では長側面に格狭間が三つ、短側面では格狭間一つが彫出されており、地摺りの部分は地中に埋まっている。保存状態は非常に良好である。蓮華文を彫出した奉炉石としていまのところ最大のものである。統一新羅時代(八世紀)の作品であろう。石質は花崗岩である。

(法量)

幅 一五六・〇 cm 奥行 五九・五 cm 高さ 二四・〇 cm
(図46・47・48・49)

B-④

これは憲徳王陵の前床石と称し、香炉を乗せて墓前に置いた奉炉石で、仏堂、仏塔の前に置いたものとは違うが、その形式には大した相違はない。強いていうならば三段につくる下框、その下に束を立てさらに最下にもうひとつ框をつくるところがある。

上面の天板部の丁度真中に八葉蓮華文を浮彫りで彫出する。また縁には面取りがあり、長側面には格狭間二つ、短側面では格狭間一つ彫られている。下框の三段目くらいから地上に出し、その下は埋めたものと考えられ、このような三段の下框をもつ例は仏国寺の極楽殿の前の礼拝石にみることが出来る。香炉を主体として安置する台としてその形が一番よく整っているように思える。これによって王陵前にも仏前と同様のものが用いられることを知る。石質は花崗岩である。

(法量)

幅 八〇・〇 cm 奥行 四一・〇 cm 高さ 四〇・〇 cm
(図44・45)

B-⑤灌燭寺の礼拝石

扶余から大田に行く途中論山にあるこの寺は山腹に営まれ、巨大な石仏があることでも名高い。この石仏の前に石造の塔があり、その前にこの礼拝石をみる。

上面の天板部が幅二〇五・〇 cm、奥行一〇三・〇 cm あって実に雄大なスケールを誇っている。さらにその上面には三つの蓮華文や茎などが厚肉に彫出されている。中央蓮華文は直径六〇・〇 cm、蓮肉(子房)の幅は二〇・〇 cm ある。右の蓮華文の直径は五七・五 cm、左の蓮華文の直径は五七・〇 cm ある。天板部の厚みは五・五 cm で、その下の長側面では一九八・〇 cm あって、ここに三つの格狭間が刻まれてある。ま

たその格狭間の中には覗き花文のような花卉を下からひろげ、短側面には格狭間一つが彫出され、意匠は同じである。

このような三つの蓮華文をみると、先の奉炉石の蓮華文とは趣がかなり異っていて、多分に裝飾的になっている。蓮華の中房（蓮肉）をみても凹凸が激しく、香炉など物を乗せるにはかならずしも適さないようなつくりである。しかし、この蓮華文の上にはかかるべき供物の類が置かれたことは十分に考慮されるところである。高麗時代の初め頃の作と考えられるが、その装いは確かに豪華にはなっているが、元来の物を仏前に供するという、献物几や香炉を捧げるといふ目的からは逸脱とまではいわれないが、かなり変貌しているのは事実である。石質は同じく花崗岩である。

(法量)

幅 二〇二・〇cm 奥行 一〇三・〇cm
高さ 二二・五cm (図39・40)

四、礼拝石の置かれる位置

わが国でみられる礼拝石の始源的好例は法隆寺の金堂や塔の前にある自然石の礼拝石であるが、その他の例は多くは一旦発掘されても再び地中に埋められて、現在はそれを確かめることはできない。

しかし、韓国の例、特に仏国寺の大雄殿や極楽殿においては建造物

(堂宇)は後世の復興であるが、それは旧規に則って、しかももとの位置に建てられていることは、基壇や基壇面に敷設された礎石の類からみて旧位置に復興されたものであることが判明する。

大雄殿の場合は礼拝石の前の辺から基壇までが七〇七・〇cmあり、基壇の端から堂内の本尊までの距離は八四五・〇cmあり、両者を合計すると一、五五二・〇cmある。よって礼拝者と本尊との距離は凡そ一六・〇mほどある。礼拝石の前には石造灯籠があるから、礼拝石の前に坐せば、直接本尊の姿を拝むことは、ほとんど出来なかつたのではないだろうか。古代は仏像を直接礼するというよりは「仏足頂礼」の思想の方が普通であつて仏像の姿を礼拝時につぶさに拝むというよりは三礼(三拝)のときにわずかながら仏の姿を拝むことが出来るというものではなかつたかと推察される。(図21)

同じく仏国寺の極楽殿の場合も礼拝石より中尊までの距離は一、三六四・〇cmあつて、礼拝者は本尊の仏像との距離は一五・〇m近くあつたことになる。(図20)

このように古代仏教徒は仏像を間近くに仰ぎみるというよりは、一〇m以上も離れたところから遙かに礼拝するというのが正しい礼拝のあり方であつたようである。

さて、また大雄殿の場合、礼拝石から後方のある中門に礎石までの距離を計ると一、二七三・〇cmあつた。よって雨天、降雪のときなどこの中門にあつて本尊を礼拝したとすると本尊から二〇・〇m以上の

距離があることになる。しかし、この中門や回廊からの礼拝のあったことは当然考慮しなければならない事柄である。

五、礼拝石、奉炉石の形態とその起源

礼拝石と奉炉石とはその上面天板部に蓮華文の浮彫りの有るなしの差は顕著なものではあるが、その他は基本的にほぼ同様の形態を保っているのが特徴である。よってその発生の源は全く同一のものであるといえることがいえるかも知れない。

まず上面の天板部分に相当するところは、そのほとんどが周縁部に面取を行っている。これはこの部分に何かを物語る名残ではないかと考え、それは几檯などの名残であろうと考える。天板部はその下の少し蹴込みを行った側面と異なって四方に少し張り出している。側面の格狭間を彫る部分は申すまでもなく、これは台脚をあらわし、上の刳形は天板を支える持ち送りであり、下方にはこの脚をひろげて安定をはかるもの、その下の框座は脚の下に補われた台輪、すなわち地摺りである。

このような礼拝石や奉炉石の形状をつぶさに観察すると、これは法隆寺献納宝物(図52・53)や正倉院宝物の中にみられる長方几、あるいは経台、経几と称されるもの、あるいは献物几などと全く同じ形状をもつものであることがわかる。格狭間、あるいは面取りなどは礼拝

石の古形、旧形の名残りであり、これはとりもなおさず元来は木造の几、案というものであったことを物語るものと解される。献物几や経台、経几など木造、漆塗り、または彩色仕上げであったとしても、これらを堂塔外で、しかも地面に直接置かれた形で利用した場合、これらにも大いに左右され、その損耗も甚しいものがあつたであろう。それによって木造から石造のもの、恒久性に富むものへの改変があつたと考えられる。八世紀頃すでに木造の礼拝几が石造の礼拝石に造り替えられていたとするならば、木造の礼拝几が用いられていた時代は更に遡ることもなる。

要するに礼拝石や奉炉石などはその形状・形態から思考して元来は木造であつたものが、石造で造られ恒久化をはかつたことによって、それが今日まで伝存することになつたといふことができる。

奉炉石の蓮台の上に置かれた香炉の形状も推測しなければならないが、わが国にあつては正倉院にある香印坐(正しくは香印坐花)といふようなものであつた可能性も考えられる。高麗時代以降流行する金山寺香炉のような独特の香炉が考案されているから、もっと他にあるかも知れないが、何故に香印坐を引き合いに出したかといへば、扶余博物館にある香炉の火屋が心にかつたからである。銅鑄製透彫りの六角形の火屋である。頂上の飾り(宝珠か)は失われ、蓋の部分になり破損しているが、現在はこれが復原修理されている。これは忠南道扶余郡扶余旧校里扶蘇山の西腹寺址より、一九六八年九月二七日発

見されたものである。正倉院の香印坐にはこの火屋が欠失するが、この扶余のものは逆に香炉部分が欠失している。この火屋から推測して香炉は六角を象った直径一尺(三〇〇)高さも同じ位のそこそこの銅鑄造の香炉であったであろう。こういう香炉であれば礼拝石、あるいは奉炉石に置いておいてもふさわしいものであったかも知れない。

礼拝石や奉炉石の起源は、わが国に木造で現存する献物几、あるいは経台、経几と同様やスタイルをもつもので、仏前に供物を供する献物几がやはりその最初のものであったろう。中国の敦煌莫高窟などを見ても香炉の果した役割は灯明や華より大なるものがあつたことが想像される。木造のものから石造への転換はその利用法にもとづくへい害によるといつてよいだろう。先述のごとく地面に置くこと、湿気を受け易い、木製ではぜい弱である。これらのことを石造の礼拝石、奉炉石はすべて解決した訳であるから、その形状だけはあくまでも旧態を遵守しながら造られてきたということがいえるのではないか、と思考される。

六、結語

近年仏像と仏堂との関係や、仏像をどこから、どのようにして礼拝するのが正しいかという方であるかというような問題に興味を持ち、これをわすれずかではあるが追求してきた。

韓国の古い寺院において認められる礼拝石や奉炉石の調査もそういう課題の一環である。わが国の礼拝石などの相関々係などを十分に考察しなければならぬと思うが、それはこれからの大きな課題である。わが国においてほとんど見ることのできなくなった礼拝石や奉炉石を韓国において数多く、しかも具さに見ることができたことは一種の驚きを感じると共に、また大きな欣びでもあつた。

古代において存在した仏教行事や儀礼の本然の姿の一端をこれらの石造工芸品から学びとることができたのである。亡びやすい仏教美術の品々の中にあつて、礼拝石や奉炉石に対する認識が新たに生れ、これらの遺品がこれから大切に取扱われるようになることを願つて止まない。

追記

先般渡韓して新たにその存在を知りえた作例として次の二例を補足しておく。

一、海印寺 礼拝石 一基(八世紀)

二、国立公州博物館境内 奉炉石 一基(八世紀)

なお、仏国寺においては、小生の指摘に従つて「礼拝石の上にあがつてはならない」と墨書した木札が置かれてあつたのは欣ばしい。

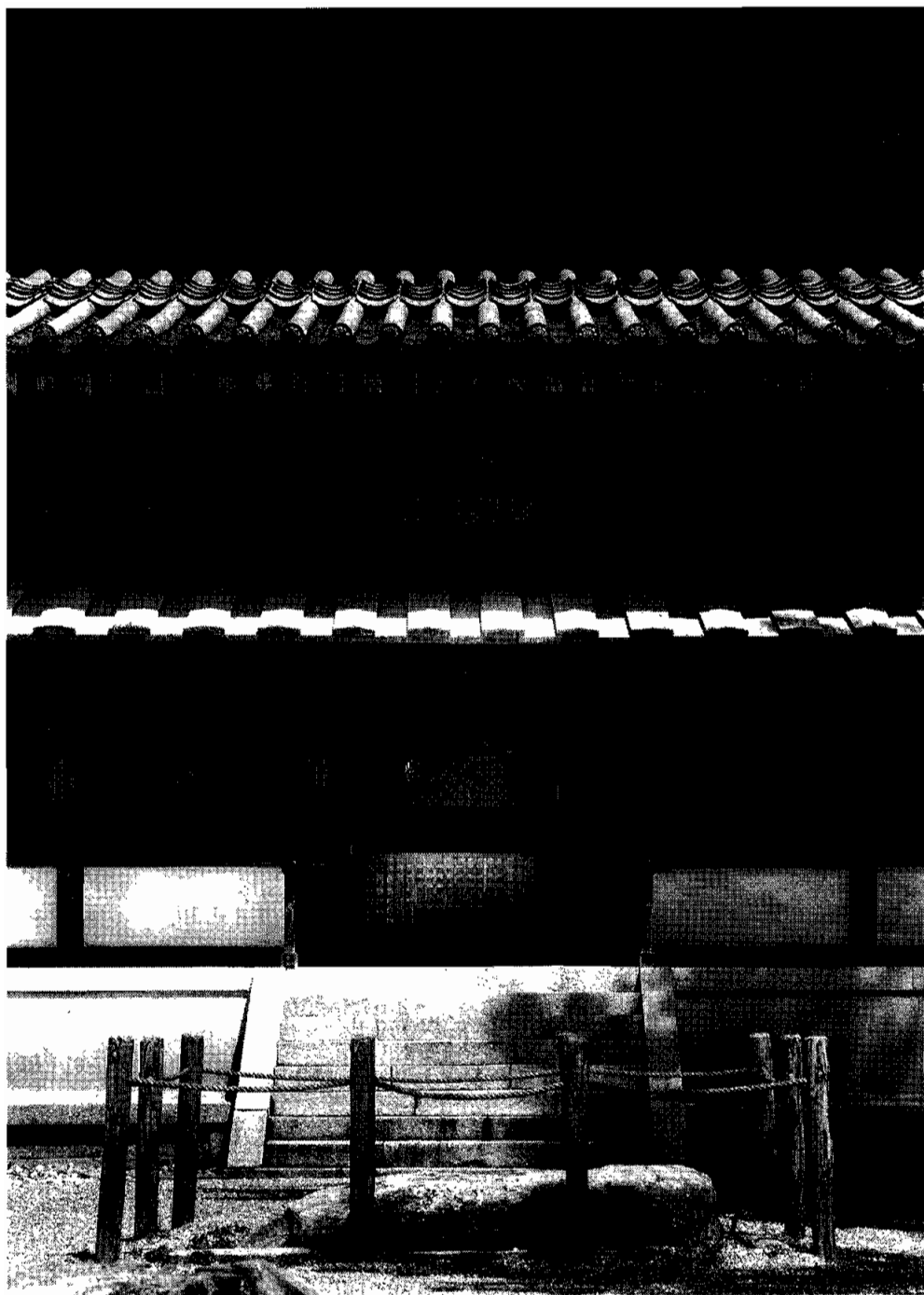


图 1-1 法隆寺金堂前礼拜石



図1-2 法隆寺金堂前礼拝石

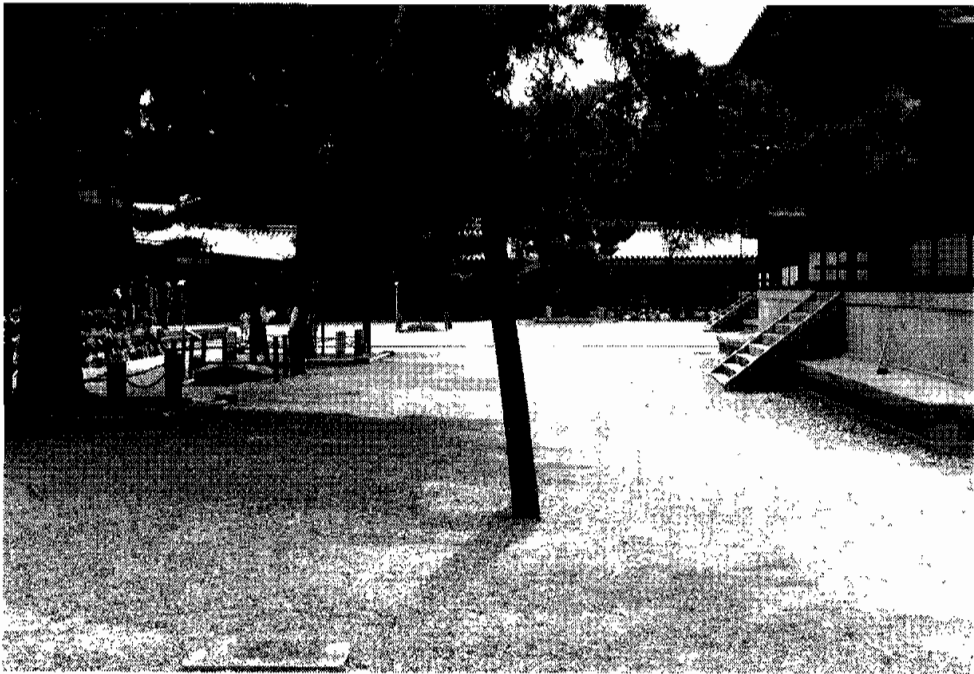


図2 法隆寺礼拝石から基段までの状況



図3 法隆寺金堂前
礼拝石

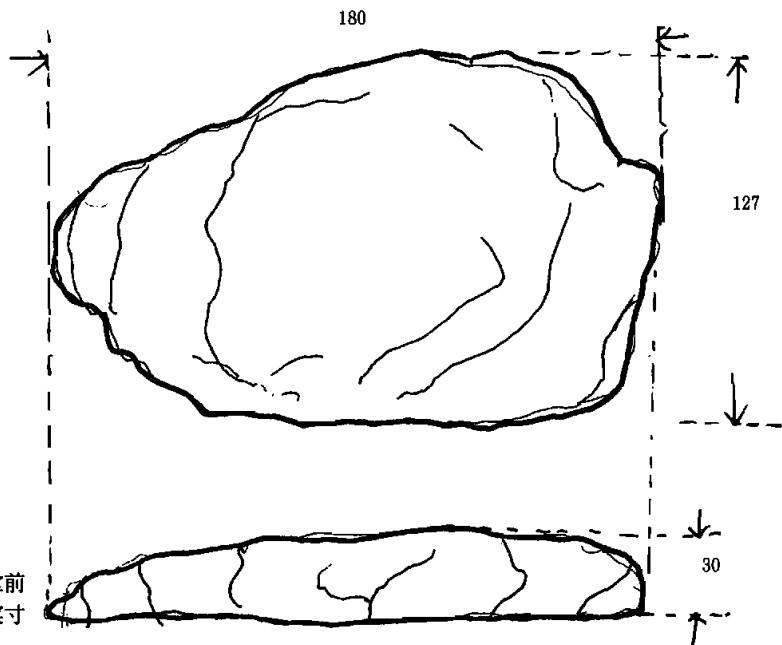


図4 法隆寺金堂前
礼拝石の実寸

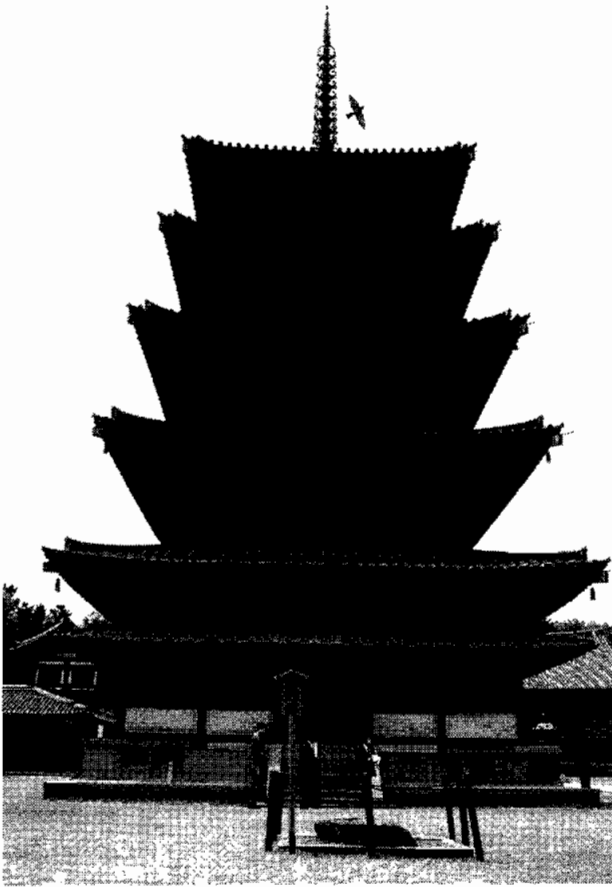


图5 法隆寺五重塔前礼拜石



图6 法隆寺五重塔前礼拜石



图7 法隆寺五重塔前礼拜石

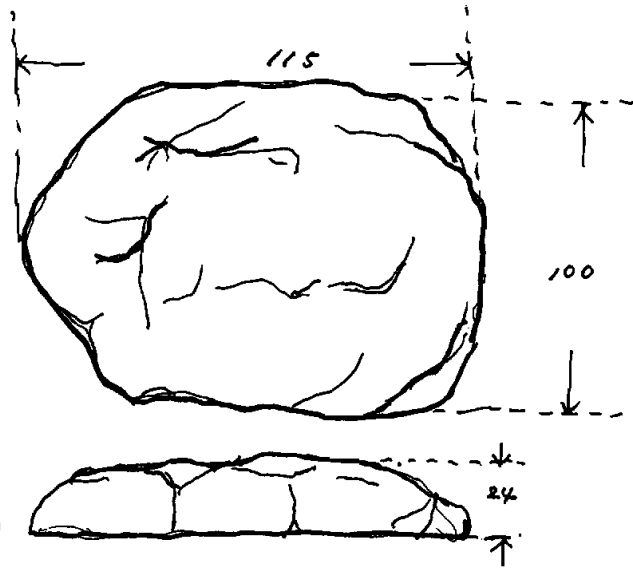


图8 同礼拜石 (实寸)

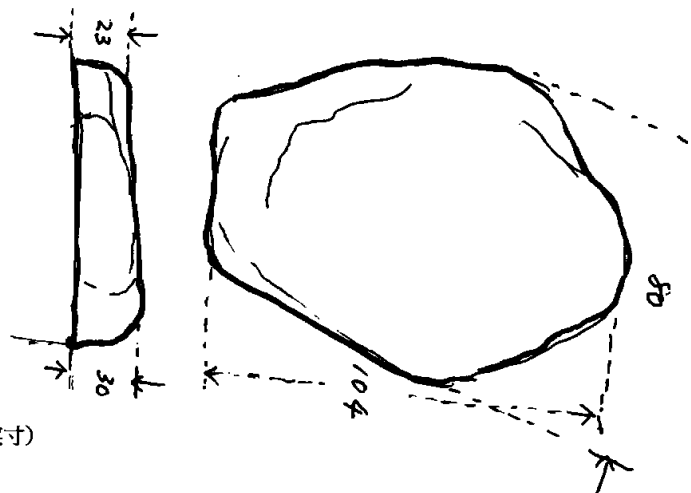


图9 当麻寺金堂前礼拜石 (实寸)



图10 三仏寺本堂前礼拜石

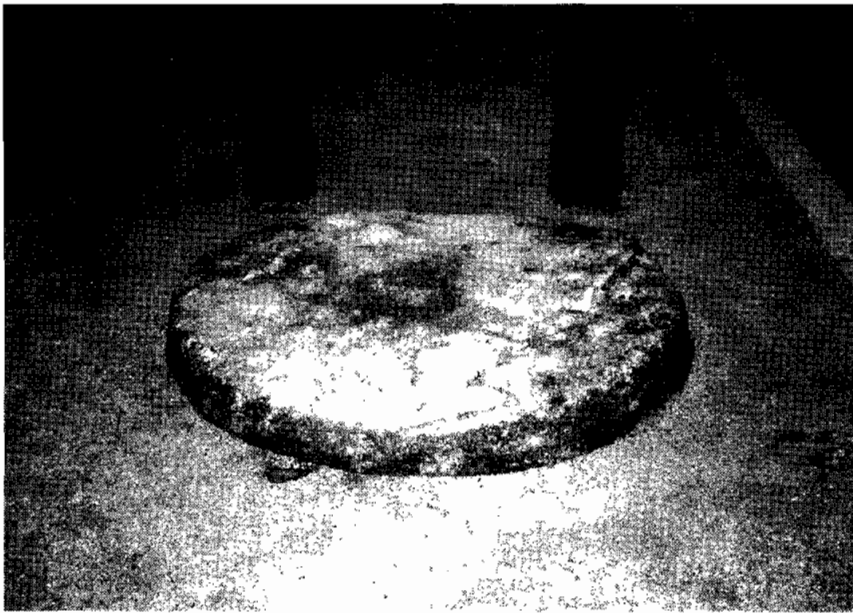


图11 三仏寺本堂前礼拜石

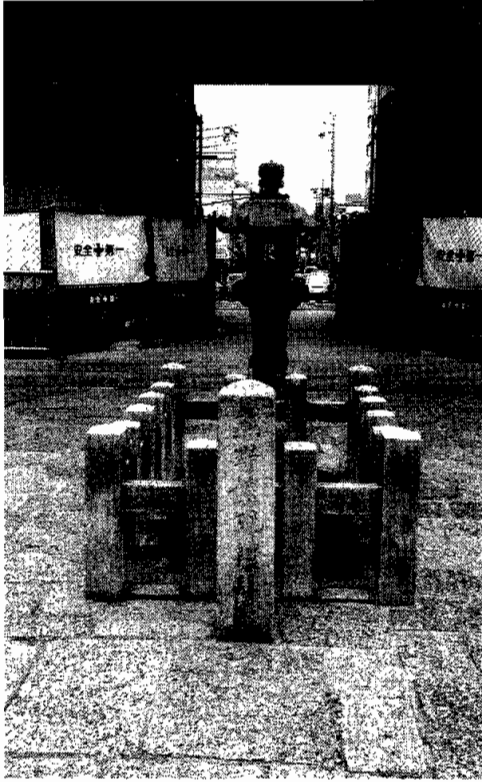


图13 大阪四天王寺礼拝石

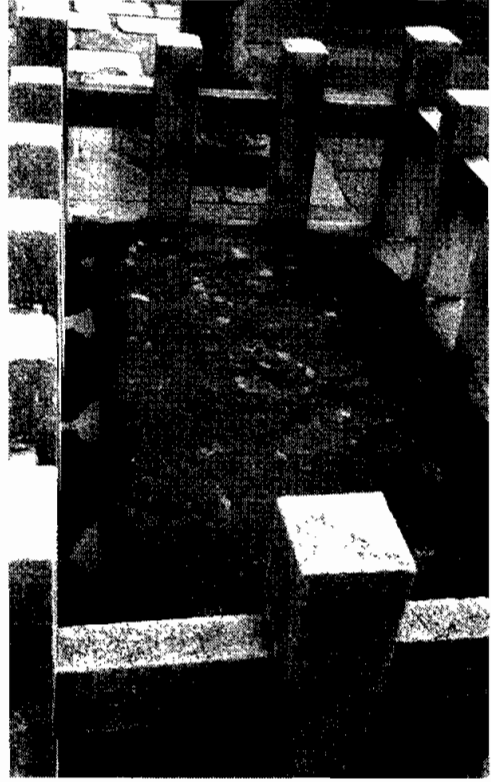


图14 同左

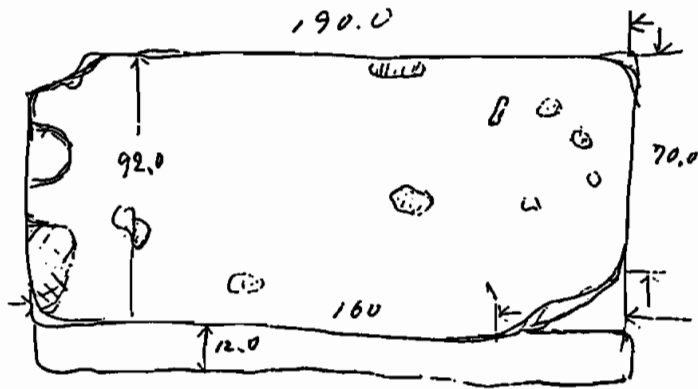


图15 四天王寺礼拝石

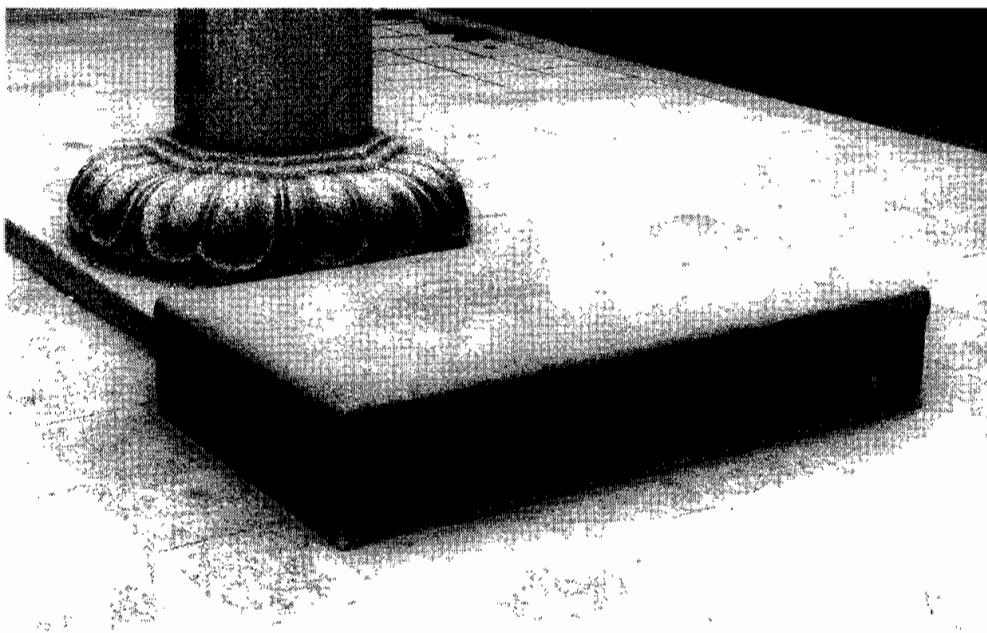


图16 慶州仏国寺大雄殿前礼拝石

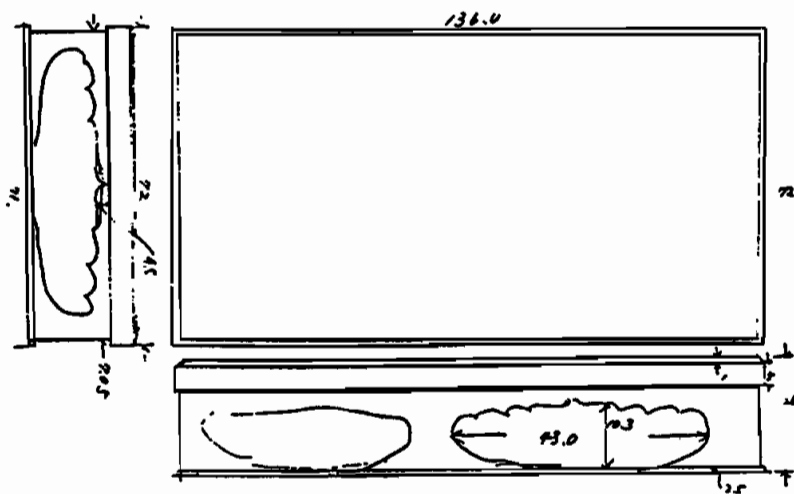


图17 仏国寺大雄殿前礼拝石 (実寸)

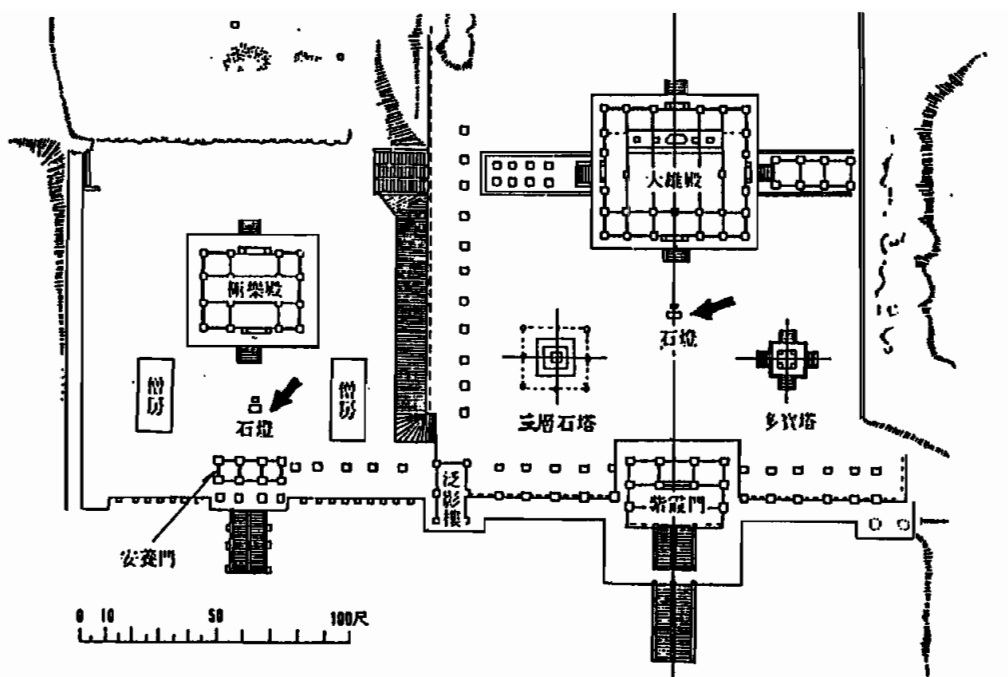


图20 慶州仏国寺大雄殿・極楽殿平面図

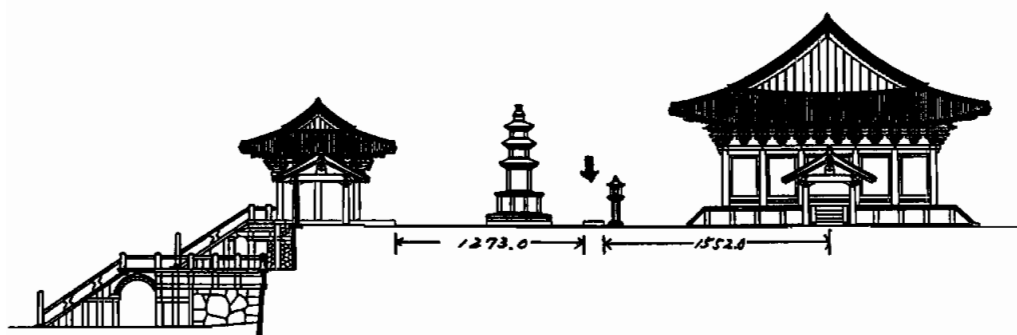


图21 慶州仏国寺礼拝石・極楽殿距離図



图22 通度寺礼拜石 (拓本)
 (铭)「大康王一年」(1085)
 遼年号
 高麗宣宗2年に相当

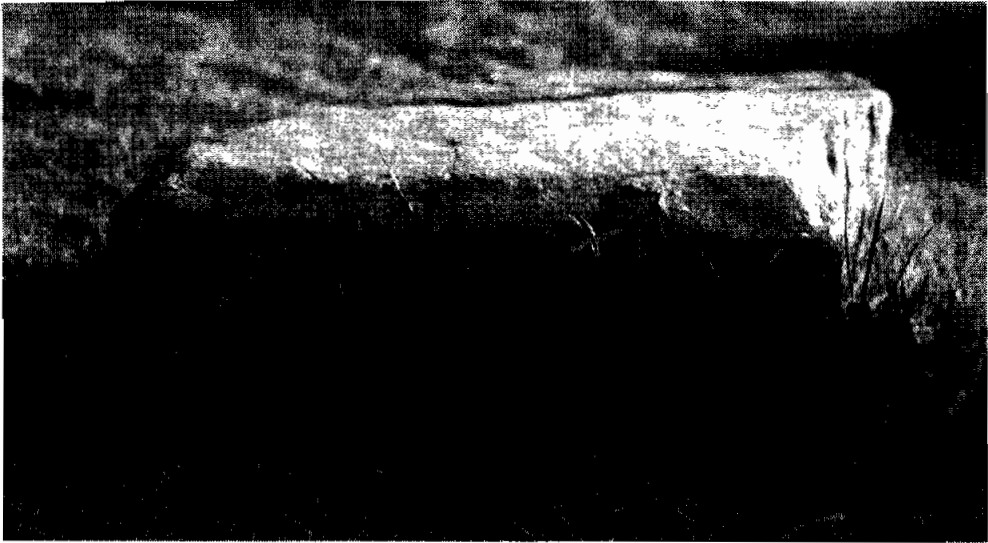


图23

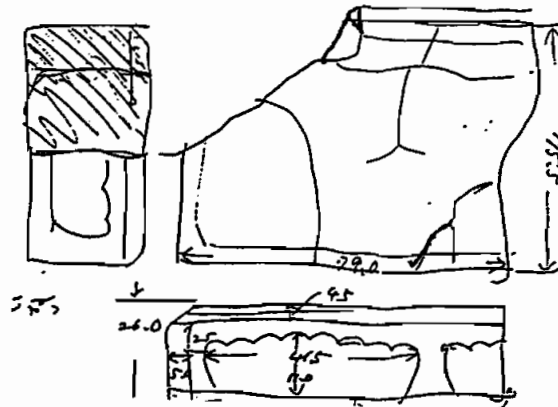


图24 慶州博物館庭 礼拜石



图25

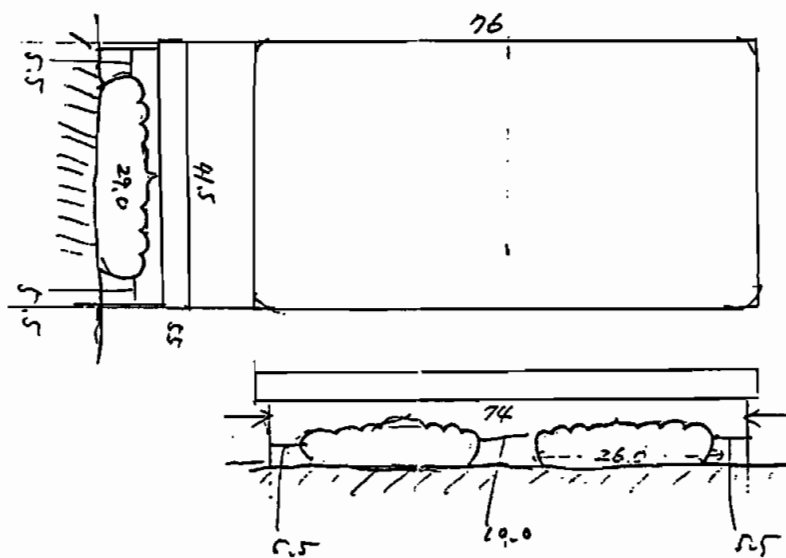


图26 慶州博物館庭 礼拝石

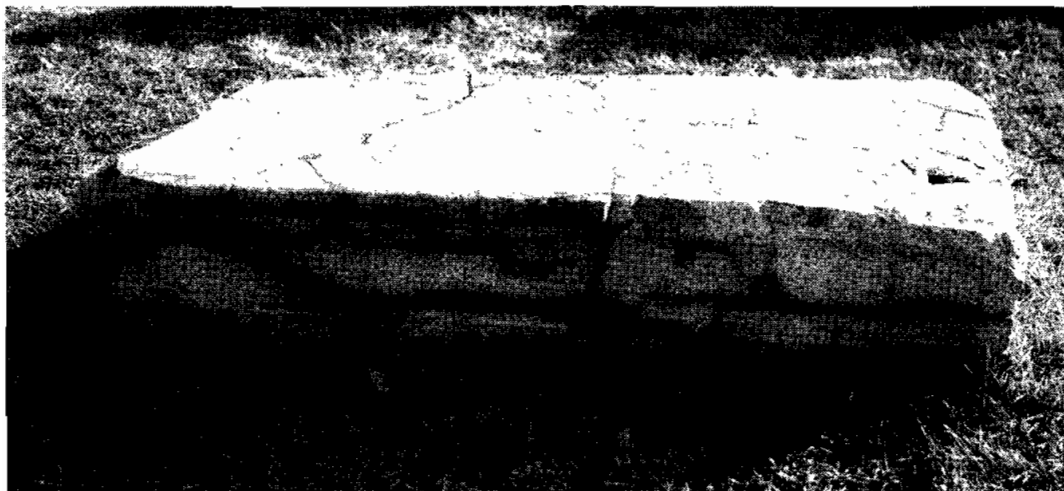


图27 慶州博物館庭 礼拝石

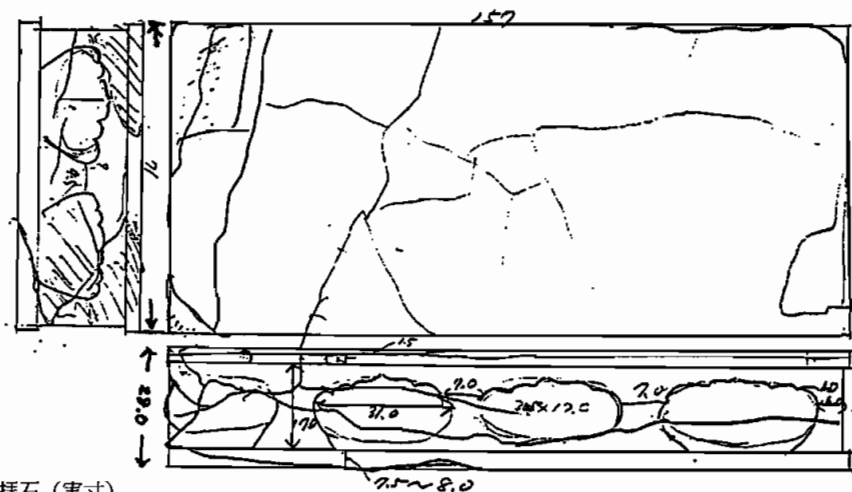


图28 慶州博物館庭 礼拝石 (実寸)



图29 弥勒寺礼拝石（長側面）

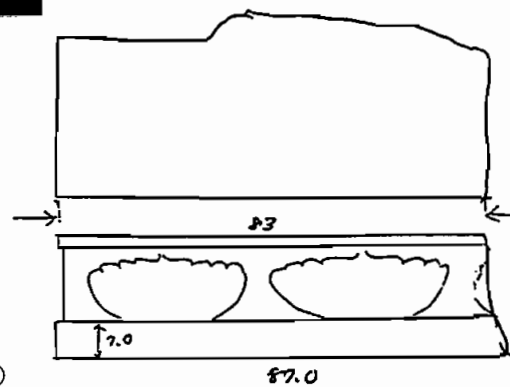


图30 弥勒寺 礼拝石（断片）

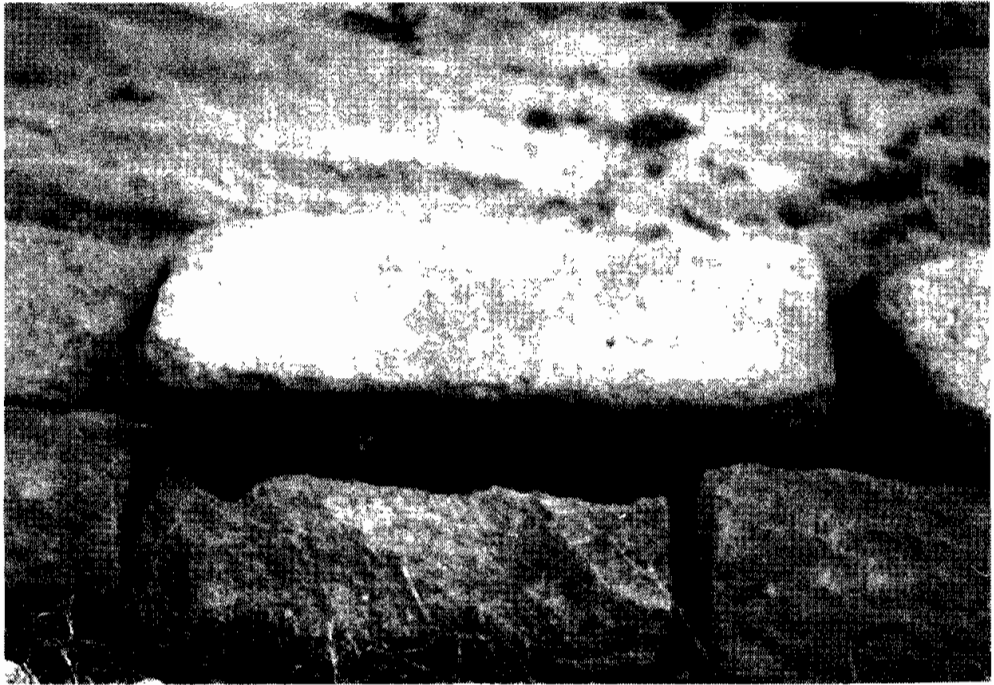


图31 弥勒寺礼拜石（断片）

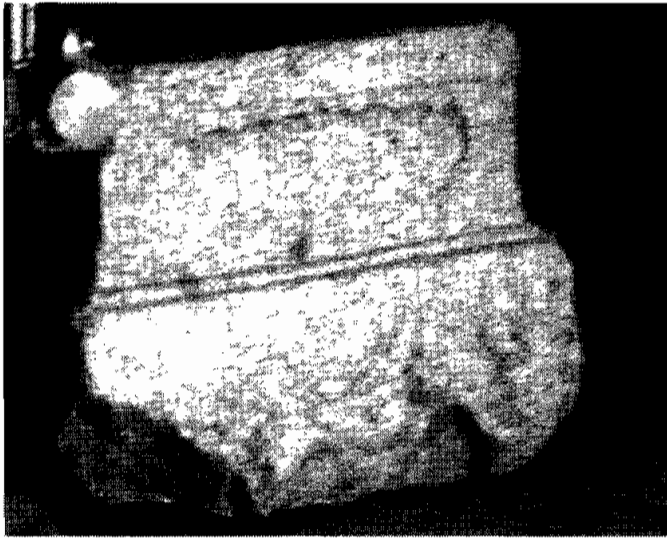


图32 弥勒寺礼拜石

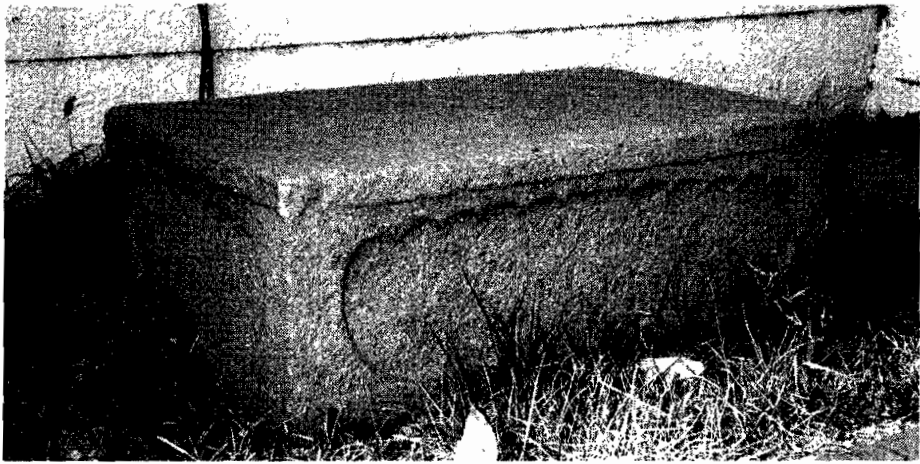


图33 東国大学礼拜石

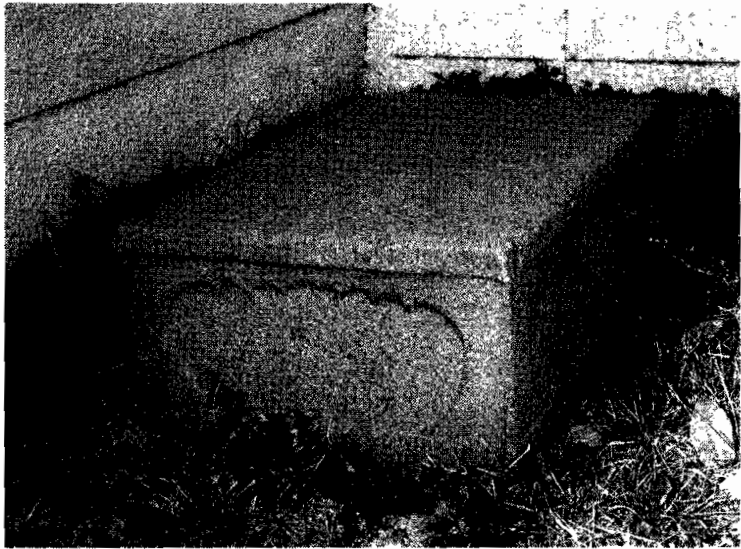


图34 東国大学礼拜石

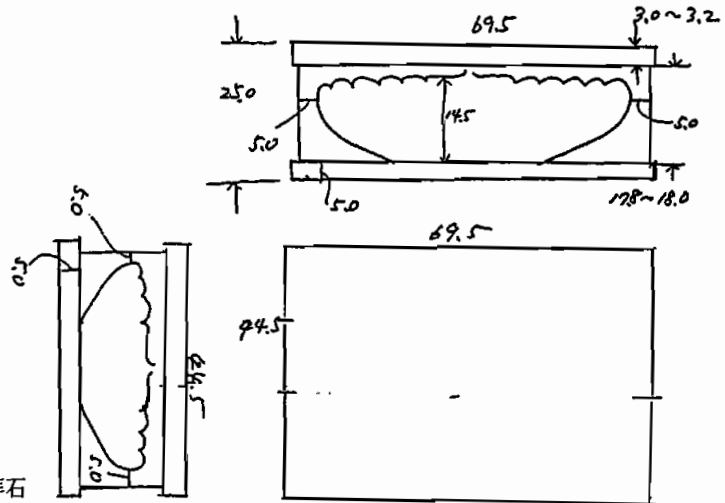


图35 東国大学礼拜石

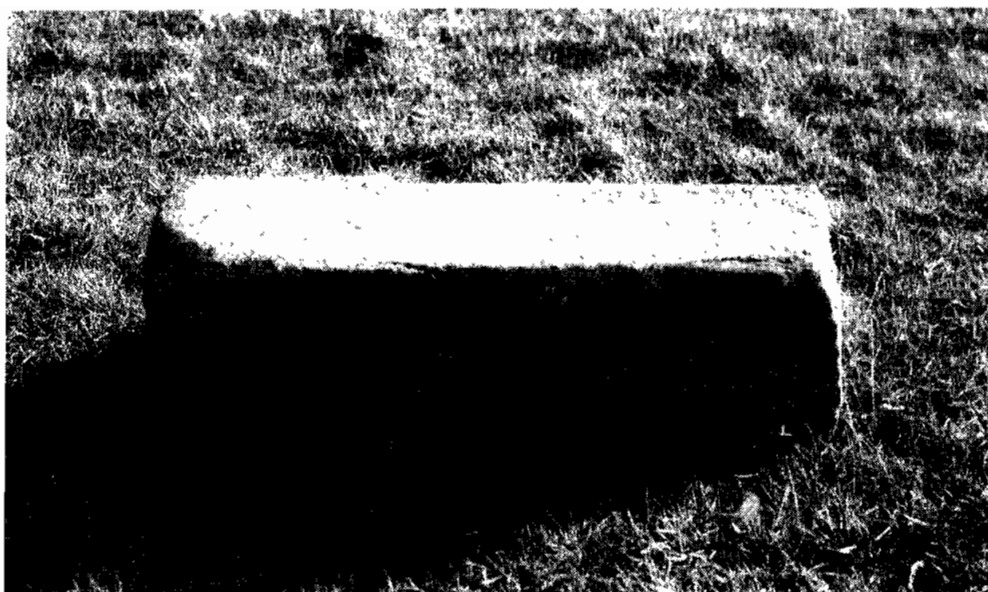


图36

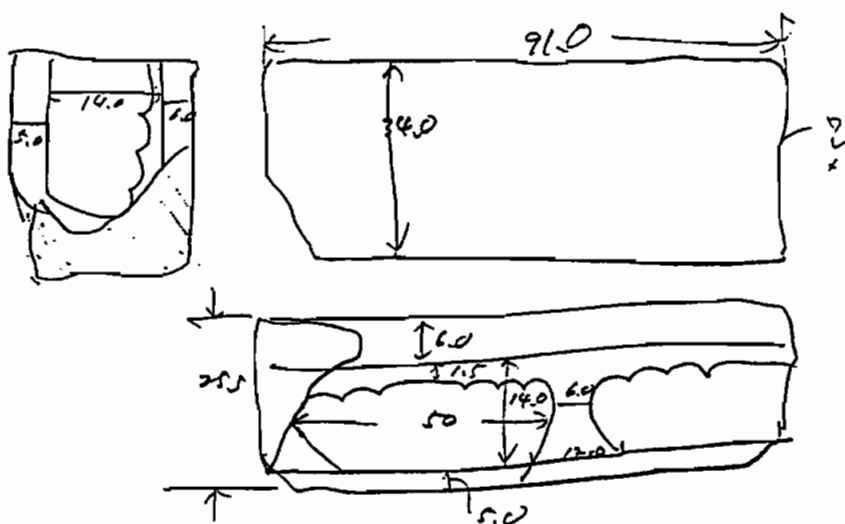


图37 慶州博物館 礼拝石 (破損、断片)

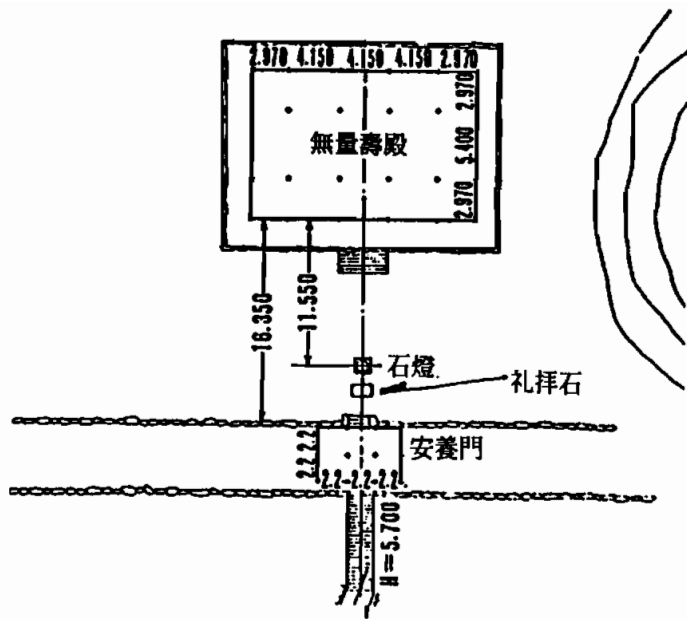


图38 荣州 浮石寺礼拜石·無量壽殿

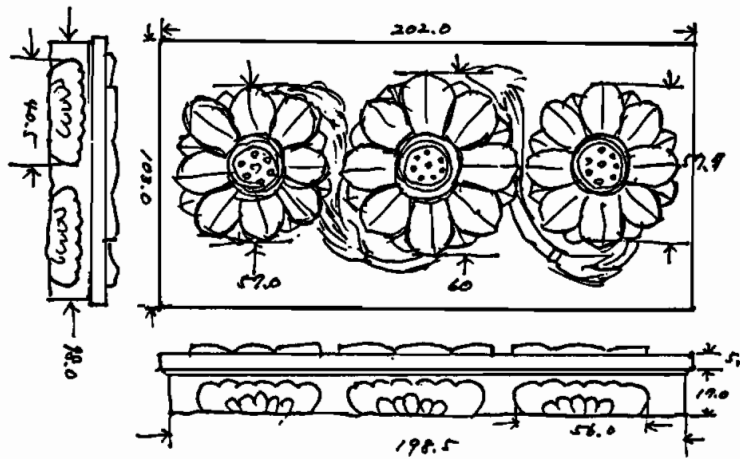


图39 · 40 灌燭寺礼拜石



図41 慶州博物館庭 灯籠及び奉炉石（邑城址出土）

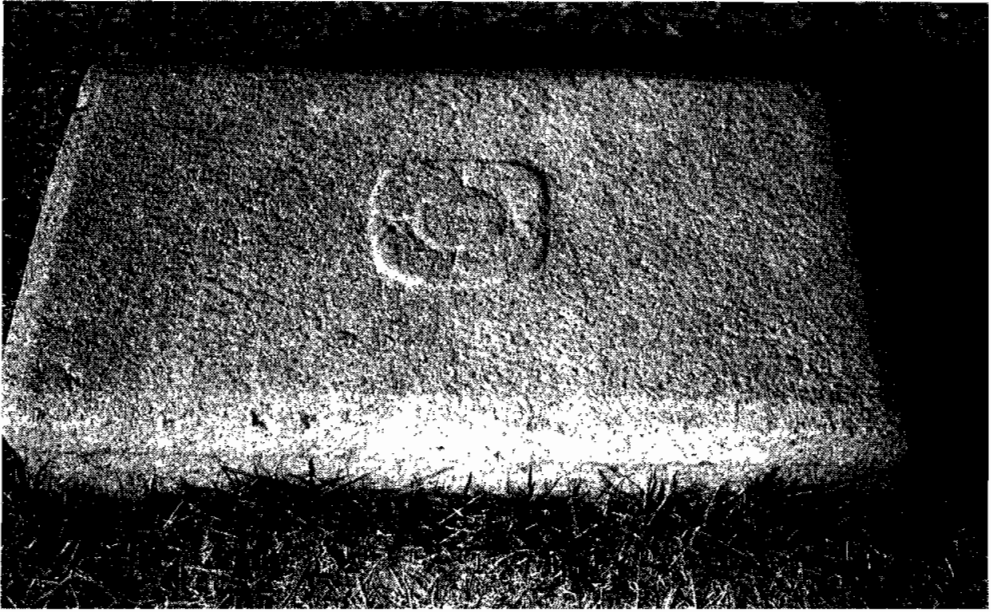


图42 慶州博物館庭

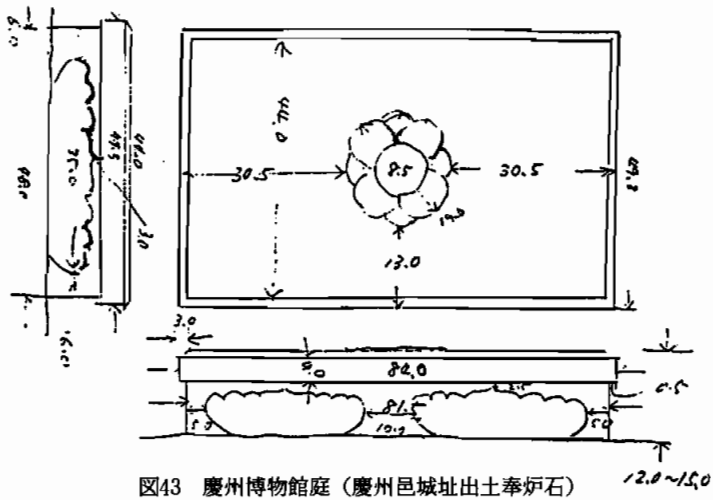


图43 慶州博物館庭（慶州邑城址出土奉炉石）

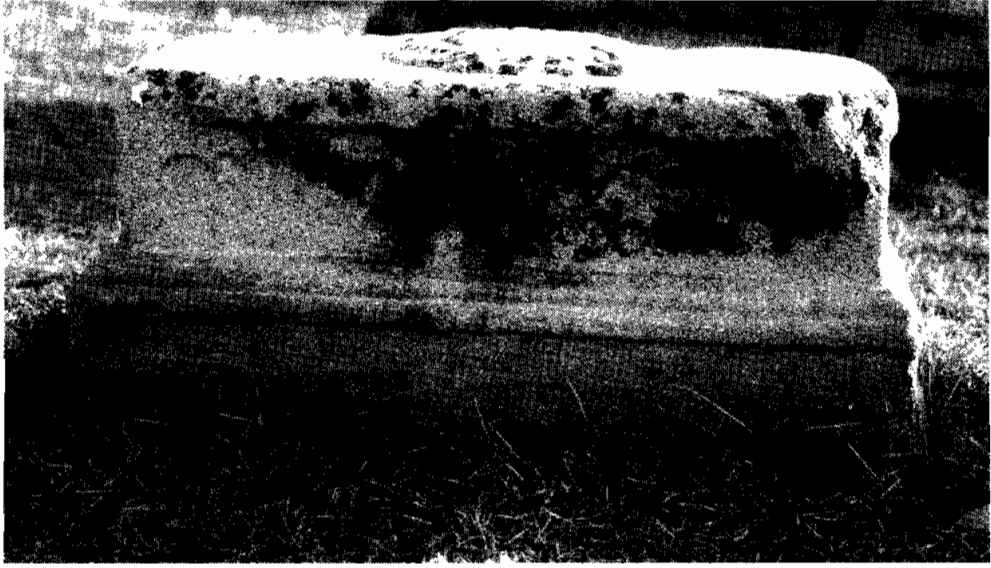


图44 慶州博物館 奉炉石

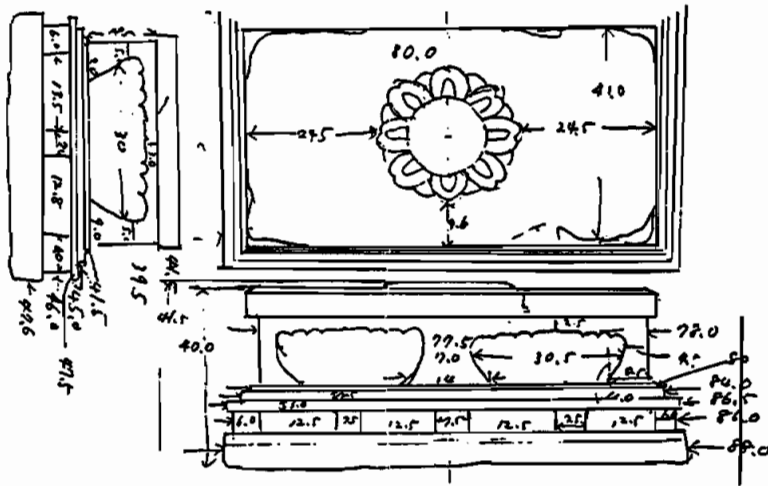


图45 慶州博物館 奉炉石 (実寸)



图46 慶州博物館庭 奉炉石

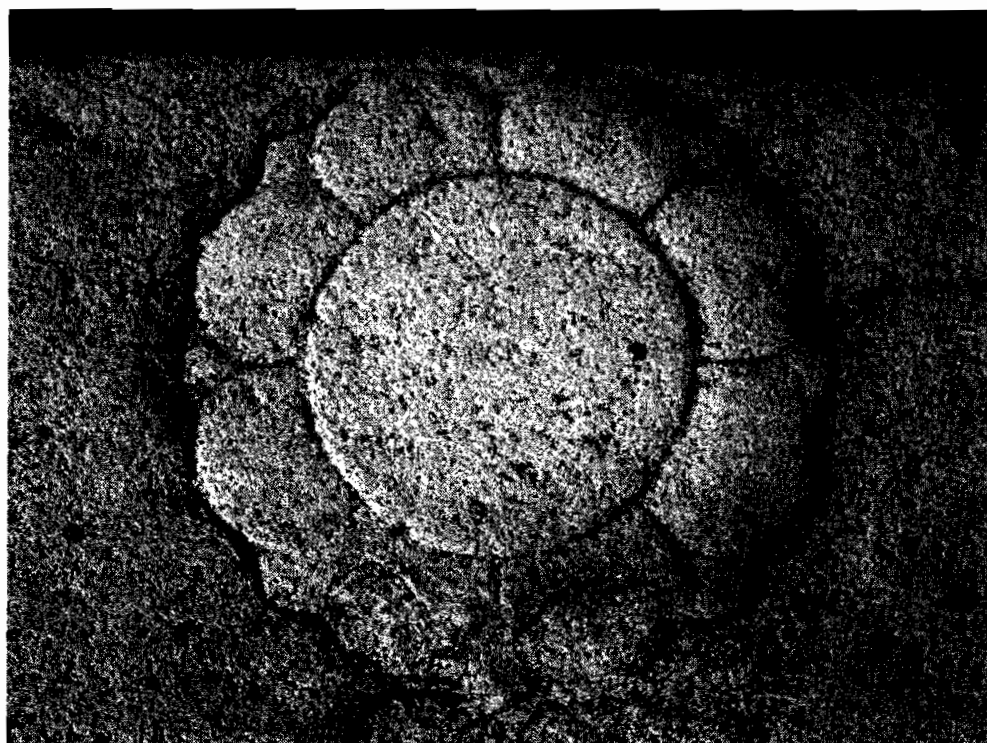


图47 同上 奉炉石(蓮華文)

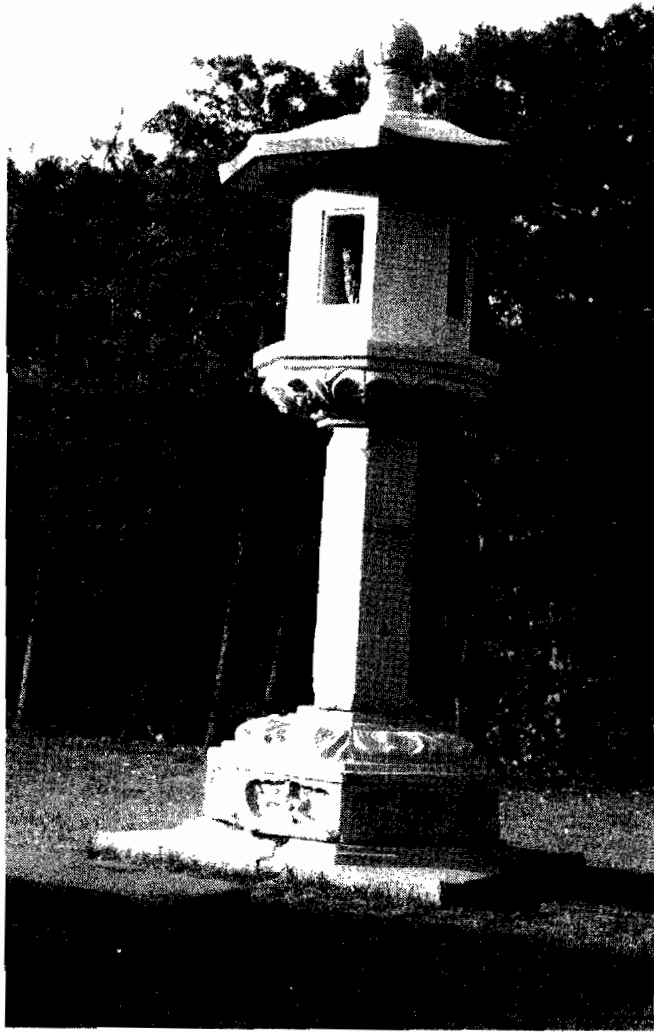


图48

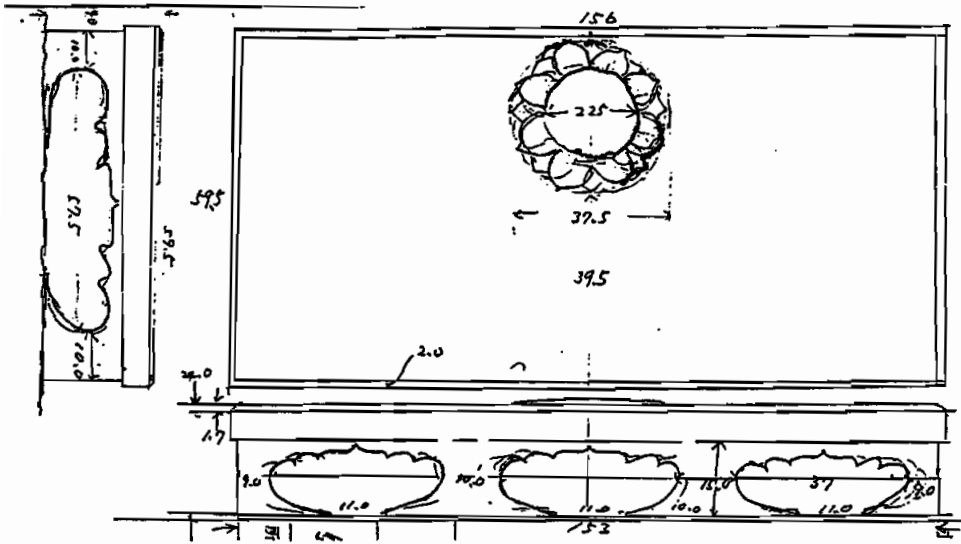


图49 廣州市校洞出土 礼拜(奉炉)石(実寸)

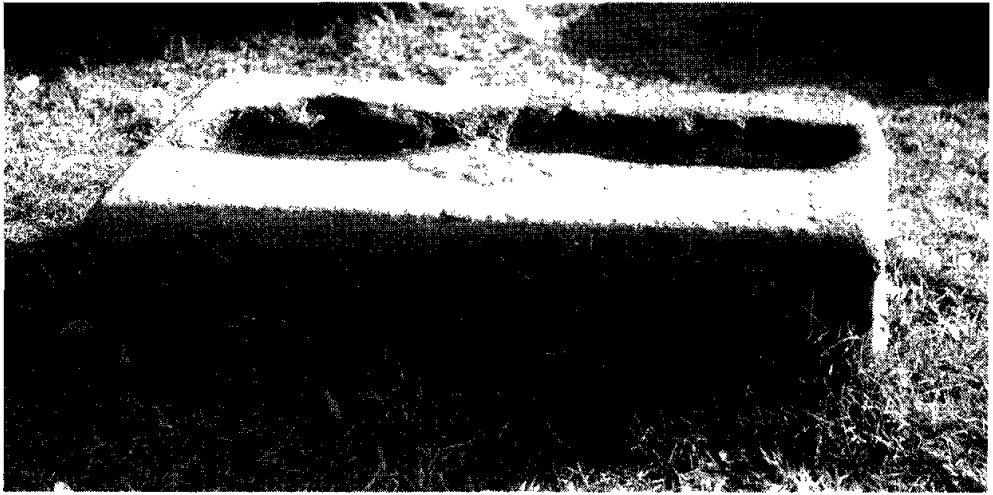


图50 慶州博物館庭 奉炉石

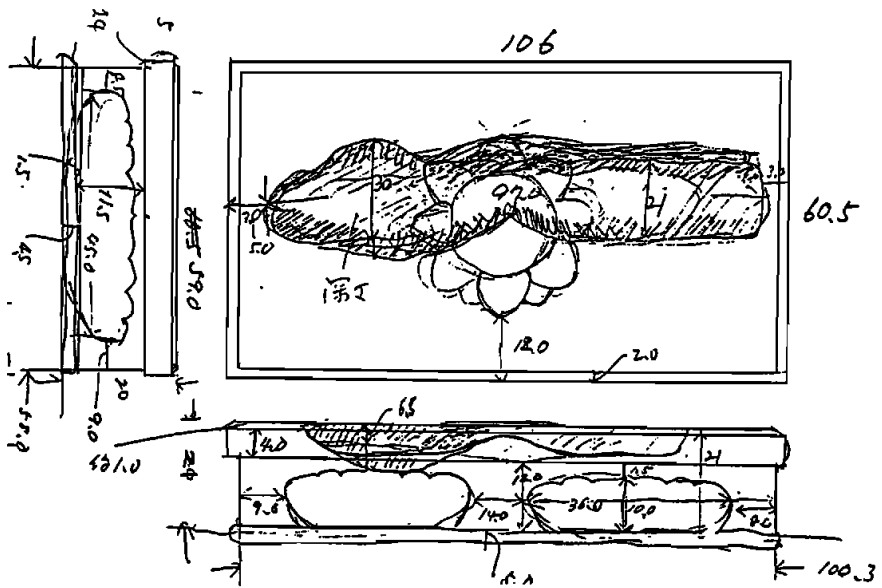


图51 同上 (実寸)

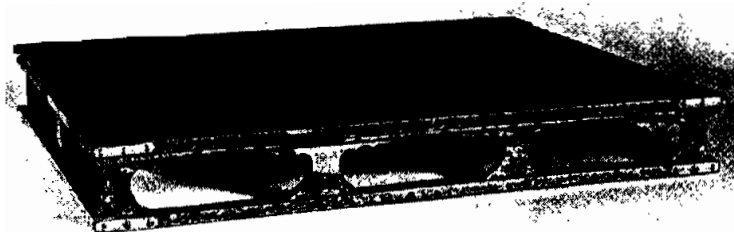


图52

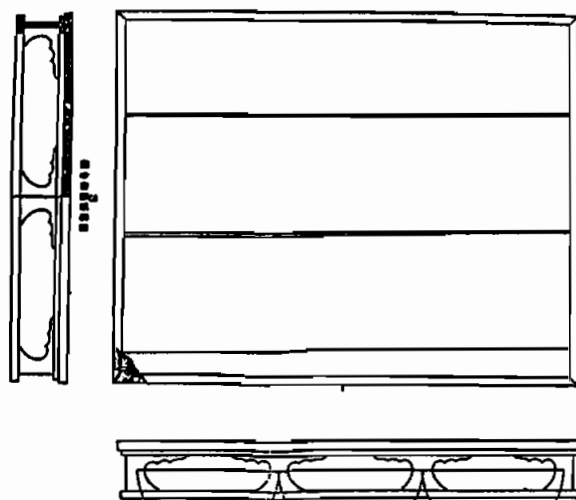


图53 法隆寺献纳宝物 经几